
有りがちな詩

早川計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有りがちな詩

【Nコード】

N0459X

【作者名】

早川計

【あらすじ】

時々立ち寄って、書いていきます。

自転車

自転車

少年がふつと息を吐く

冬の朝の白い空気が冴えているのだ

どろりて吐かれた息は白く 身が強ばる

かといって凍えているわけでもなく むしろ頭は無心に澄んでいる

別の場所で少女が寒そうにしている カバンを持って学校への道を歩いて いる

世界はみなに同じなのだ 残酷さを有していても 知らないものがあったても そのとき綺麗なものが存在している

さて 進みゆく日

少年が自転車をこぎながら

光に白く染められながら

少女がより一層寒そうに しながら

くしゃみに鼻をすすりながら

いま冬がとても眩い

赤い大根

火星に大根の種を植えた
荒れた大地

赤土のようなギラリと降る光

ゆっくりと育って大きな 赤い大根ができた

唯一の生命 水はある（ あった？ ）かもしれない

人参じゃないよ

嗚呼、悠然たるちいさな 野菜

誰かたべにくるよ

サンデイ
日曜日

日曜日ってさ、赤いよね 水曜日と数字の6は青色 かな。

日曜日ってさ、Sundayだよ 訳すと太陽の日——英語、単純だな でも好きなひびき。

血の日曜日事件……1905年 これは覚えてるんだ 外国のバンドが歌ってた、かな？

遅くなってきた 西日が まぶしい もう日曜日、終わっちゃうね。うーん、明日月曜日だ。学校始まる。大変。楽しみ。

ねえ、あしたどっか遊び に行こうよ。

太鼓

◇太鼓

材料…かたつむり、骨・鉄、焰、革、街の残り、果実・カカシ、春の甘さ ……その他諸々。

説明…

叩くと音が出ます。時、場所、人によって音が異なります。誰かと一緒に演奏してみることが勧めます。（補 足・共鳴させると尚良い ピアノ等）何よりあらゆる組み合わせがたいせつ。最後にあなたの哲学が得られるよう…… 数かぎりない音楽が生まれるよう……

□

キス

しまうまたちがキスする とき
くさはらに風が吹いてい く

恋人たちがキスするとき あたりはまっしろになる

親子がキスするとき

野球ボールがホームラン される

鳥たちがキスし合うとき 夜空には満天の星。

（ひとりの悪い奴が好きな 人に愛を叫んだ

悪いところから出た 明 るいところへ行くんだ

きみよ。たとえほのおに 焼かれても関係ない 歩いていって
きみに会い にゆく。 きみよ！ 天使のような きみよ……
沈没する船だって 崖だ って 孤島だって 剣だ って

どこかに行ってしまうま えに ぼくに顔を向けて ほしいんだ
……)

キスとキスが出会うとき 一つの小宇宙ができる
宇宙をコンタクトレンズ で見ると、
水色の地球を見ると、
無数のドラマがあった

人がロマンを探すとき
愉快的映画が暴れだす

缶ビールが空を飛ぶ…

そして

おだやかな日

恋人たちがキスするとき 、二人が奇蹟につつまれる。

ギターガール

ギターガール

人知れず少女がすたすたと大股で出てきて 歌を歌う

弾いているのはその体に似合わない大きさの 不恰好な黄色いエレ
キギター

ジャンジャンジャカジャカ、ジャン……

海に向かってけんめいに掻き鳴らす

(海の向こう 光っているもの……)

彼女の作る音楽は 波に消されて聞こえなかった

ギターの作る振動が 少女の耳をわずかにゆらす

そうして孤独な歌声が 空の果てへと響いていくか
遠い火山のマグマが 変わることなく流れていくか

ひとしきり終えた少女の顔は 満足の欠片も見えた気がして
しかし幼くいたいたしかった

前に広がる景色は 晴れ晴れとしているというのに！

くる日もくる日も歌いつづけ 歌いつづけいることすら忘れようと
していた少女は
唐突に自らの絶望を悟った また嬉しかった
とても稚拙な悟りだった

鮮やかな雷が落ちた (それはギターの願い?)

ガラゴロ雷鳴が轟いた (少し遅れて)

落ちたあと もうなにも残っていなかった

チヨーカー

チヨーカー

こなごな

散り散りのチヨークを拾い集めて

変幻自在の白い文字

苦勞しつとも操ろうとして

おとなに墨を引っ張って

砕けた石に白墨を引っ張って

そこにパールをほり込んで

絵の具へ絵の具をかき混ぜて

怖い幽霊にでくわして

くらいもりから走りでた
北へ北へと進んだ

なかに鳩を入れて
フンが散らばって
徐々に人が住み始めて

平和が満たされて (白い鳩だった)

岬で犬が遠吠えして

正義だけが残った

正義は幼稚で 容赦なかった

あらゆる強さ 弱さを焼き払った

もりを溶かす大文字の火が……

そのうち鳩が死んでしまった

悼まれることを求めず

それでも悼もうとする人から離れて死んだ

……凍れるハトの剥製……

結局

お墓が作られた

勝手なことに！

盛られた花束 殺伐な彩り

あらわれたひと チョーカーは

おもむろに白墨で

悩ましげにいくつか文字を書き入れた

ノートには

阿呆な言葉 切実な翳り

うつしくしき昼夜の寝顔はどこへ……？

青い夜の光

青い夜の光

或る場所で

星が夜に上がっていったのは カガミが泣いたからだだった。

求めているものはなかったと彼女が言った。

そうかと 彼は落ち着けて言葉を返した。

それらに答える声はなく 漂う孤独な透明がより強くなった。

荒野を駆けるオオカミのように

赤道にふる夕立のように

輝きある卑俗さを得るということはない。

あるいは後に

天裂くきれいな流星を得られようかと。

青と夢

祭壇に刺さる一輪のちいさな花を見よ

茫洋と広がる青き夜

黄の花 仄かに光あれ

空に在るかすかな星

一面の闇 白き光咲け

流星天を射よ あとは光 優しげに残るのみ

そう

無機質なこの土地に 語らいは向かない

二人の合う息遣いに ただ頼りなく震えるだけ

歩き去る

祭壇を背に歩き去る…

或る日 おさなき彼女たちの夢

アレフ・カガミの青春の夢

詩人T

詩人T

一人の男が歩く。彼はTテイとなのり 詩を読んだ。

自嘲するかの如く 奇妙になにか歌い上げた。

こんなふうにして 詩人の気取りとみられるだろうが

嘗て 極東に於いて夢を見ただろうおれに

詩作は最早 叶わない。

叶わぬが ふと熱がおれへと返るたび

こんこんと雪 山すそこに降り 詩業才たる男の幻をみるのだ。

滑稽さ。わかっているよ。

(周囲の 若い木の悲しみと 一本の まるで神の武器の巨木が在る)

けれど示したい。呪い解けずして 小果たる自分が、一心に燃えて
憑かれる自分が、存在していたということを。どうしようもない願
望の果ての、愚かなしるし(・・・)として。

……少し喋り過ぎた。気醒めに一つ、好きな詩を読んでみせるよ。

夢はいつもかへつて行つた 山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり 火山は眠つていた

——そして私は

見て来たものを 島々を

波を 岬を 日光月光を

だれもきいていないと知りながら 語りつづけた……

———……

数枚の木の葉がつむじ風に卷かれ、
キリキリと螺旋状に舞い上がった。

詩人T（後書き）

詩は立原道造の『わすれ草に寄す』のちのおもひに、から。
青空文庫でも読めるので、気になった方は是非検索してみてください。
い。

バター

バター

くにやりと溶けるバター

塗って塗って塗りたくってひとつのオブジェができた。

人の容貌に似ていて バターのよい匂いがした。

少しずつ溶けていて てらりと光を反射した。

動きそうだが 動きはしない

うまいだろうか うまくは見えないだらあれじゃあな

なら麦パンの弾を撃ち込めば良い ということになって

漆黒のちやちな銃に弾丸を無造作に装填した。

バンバンバン。

撃ち抜かれたバターのオブジェを傍らに 通り抜けた弾丸はフォン
デュのようで 火をすつと焚きつけた。

人は焦げ気味の匂いに意識をさ迷わせ とろりとした甘いくちどけ
に喜んだ。

傍らにはオブジェがぽつり立っていた。胸に穴を開けたまま。中身を空気に晒して。

こどもが気付かれないようオブジェを連れていった。

かわいい誘拐。だけれど真剣な、非常に真剣な表情をして 両手をべたべたにしながら駆けていった。

甘い残滓。静寂。

朝と夜がこない町の 少年は孤独に気づいていた。

終わりを探し始める少年の 生み出されたオブジェの 続きへを告げる。

すべて在る風景たち

すべて在る風景たち

目をつむっていると真実が聞こえるならば わたしにとっての真実
が聞こえるのなら 目をつむってしよう

暗闇に佇んでいよう

寂しい旅でなく これからの思索のため
何か大事なことが迫ってくる気がしたから

車の中で頬杖をつき 夜に身を浸す

まぶたを過ぎる人工的な光に自分を感じて 底に沈むよう

コンクリート。うなぎ屋。遠ざかるランプに ジョギングしている
人。

闇夜に 一台の銀の自動車が走り、無数の家の団らん あるいは暴
力 あるいはメキシコのパレード あるいは戦争 あるいは……

過去の残響

現在のたましい

未来の観測

翻って あったかもしれない可能性たち

すべてが今の視線で 実はずわと時間が流れるまま

今は個人の寄り添いに惹かれるまま そんなこと

私は貴方は彼は彼女は 今夜のあとの 翌朝を歩む一人である

一人として日々を謳歌する死のたましいが霧散する

ナポレオンが地を駆ける

死に神が練り歩く

知らない季節が街を覆っている

声が聞こえる

雨が降っている

波の空間

波の空間

波が吹いた。波が吹いた。

小波があつた。小波があつた。

海亀の形と石の神殿が深く深くに沈んでいるようであつた。

清涼な波。波。波。幾重積み重なる。

陽が潰えている。光が取り除かれる。

今 真っ青である。

重くのし掛かる暗さに鎮まって

今 ここはどこなのか。

海なのか、そうであつてクジラが視界をよぎるのか。

蒼い影が落ちている。

永久の水時計が流れているようで

止まっているの。と。

波なのか。

波なのか。

青がただ 広がっているのか。

鉄塔の描写

鉄塔の描写

おしなべて 次々居並ぶ塔が空想深層地帯を占めている。

工場の風情は遠くへ行ってしまつて 鉄の林立。

―ズーム。―

描き出された線が何千と走り合い 克明に描写される鉄塔が 独特の感性で浮き彫りになっている。

塔の輪郭線に従つて 乾いた風が――と駆け巡っている。

ああ 来たか。

声が聞こえた気がした。

いや、聞き取ろうとしたんだなと思った。そしてどちらでもなく、静かな語りに捉えられたのだと 確かに思った。

ぼくが声を上げる。

惜しげなくツバサを広げて文明に歯を立てるように。

わら半紙にペンが伝って時空が歪むように。

打ち出された一本の矢がぼくの頬をかすった。

先端にエナメルをこぼして赤い矢が飛ぶ。

エナメルはさらりさらりと屑鉄をこぼした。

屑鉄に光分子がまとわりついた。

固まった痛みをよそに

架空の夕暮れ。

響きあう はるかな鉄塔と十三月のそら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459x/>

有りがちな詩

2011年11月17日08時12分発行